

## A Different Kind of Heart Surgery ～ある種の心臓手術～

ニーナ・リー・アキーノ

私がなぜ舞台演劇に携わっているのかを問われるとき、答えはいつも決まっています。「この世界をよりよい場所にするため」です。根本的に、演劇が世界を変えられるものだと信じているからです。一部の人にしてみればこの信念はあまりに安易で無砲、言い古されたものに聞こえるかもしれません。しかし、これが私の走るマラソン、肩を並べる表現者たちに横を走ってもらうことが求められる長距離走なのです。私にとって、その問いに対する答えはそれくらいシンプルなことです。

演劇はこれまでラジオ、映画やテレビだけでなくスポーツ観戦、そしてストリーミング配信の普及などその重要性や存在自体を脅かされながらも生き延び、発展してきました。演劇は観客の存在が**絶対**になくてはならないというたった一つの芸術表現方法なのです。私たちみんなが一体となってその空間で起こることを目撃することによって成り立つ。考えてみたら、それってとても奇跡的なことです。私たちがステージを用意して、誰かが観に来る。背伸びしたお出かけをする友達グループかもしれないし、大切な人の演技を楽しみにしているご家族かもしれない。もしかしたら義務感から観にきている人もいるかもしれない。でもそんなことはどうでもいいのです。会場の照明が落とされ暗転する。そして次に灯りが照らすのはまさに展開されようとしているストーリーによって結束された一つの共同体であるのです。

私たちの舞台では(伝統的である・ないに関わらず)、観客は能動的に以下の事項の参加者となります。

痛みをさらけ出すストーリー

薬を差し出してくれるストーリー

外の世界を忘れさせてくれるストーリー

外の世界の存在を思い出させてくれるストーリー

お腹のあたりを殴ってくるようなストーリー

体の内側をくすぐられるようなストーリー

何かを教えてくれるストーリー

全てを忘却させてくれるストーリー

過去に立ち返って、私たちがこれまでやってきた道のりを気づかせてくれるストーリー

未来に私たちを放り出して、これからの想像を掻き立ててくれるストーリー

これら全ては極めて重要なことです。受け入れられ易い人気取りから痛々しい真実まで。心地よい演目から忌まわしい演目まで。

これまで大劇場から中小劇場、さらには劇場でないところでまで、いくつものプロジェクトを目にしてきました。そして一回一回そういった演劇に足を踏み入れるときと立ち去るときでは自分自身が全くの別人であるということを知っています。このように自分の中に存在する何かを紐解く、もしくは私たちについて・他の人たちについて・世界について私たちが忘れてしまった重要な何かを再構築する、というのが舞台芸術のなすことです。私たちは気づかないうちに、変化し、変容し、再編成されて劇場を後にするのです。素晴らしいことに、世界を変えるほどの力を私たちは握っているのです。

そう考えると、包括的で多様性のある舞台芸術業界のために結集することがいかに大切であるか、またなぜ何人もの同業者がこのために生涯を費やしてきたかを理解しやすいのではないのでしょうか。私たちの信条はハッシュタグだとか売り上げ目安だとか、政府から多くの補助金をもらうことに留まりません。ありがちな「私の住む街、住む国を反映した・・・」という言葉にだって留まりません。多様なストーリーは多様な解答を生み出すのです。例えば想像的なストーリーの語り方が一見不可能な質問への答えへの鍵を開ける。問題に対して革新的な解決策へと、限りのないものの見方へと導く。今まで見た中で最大の夢の大きさを更新する。

結局のところ、私たち舞台芸術者に課せられた役目は人々・コミュニティー・国民に、なにか直球で、本能的で、必要的な経験を共にしてもらえるよう働きかけることなのです。ただ人間であるということがどんなに壮大で重要で複雑であるかということ喚起すること。売り上げだとかレビュー、アワードなどという名前の罠に

囲まれてしまうこともある中で、それ以上によっぽど価値のあるものを世に出すこと。ある種の心臓手術なのです。

舞台の上もしくは裏でなされる仕事とは、伝達すること、大切なことを表現すること。思い出させることもできるし、忘れさせることもできる。人々を集めて行動するように呼びかけることもできる。人々の心を煽り立てることも、なだめることもできる。歴史的に、舞台芸術は私たち一般市民にとって大きな役割を担ってきました。一人一人がその価値をさらに重要な役割を担うこともできるでしょう。

現状浮き彫りになっている葛藤を目の当たりにして、私は舞台芸術そのものの力とそれが私たちにもたらす生命力のもとまっすぐな信念を貫いています。私たち舞台芸術者としての使命に果てがないというのは明らかですね。

観客が十人であろうが百人であろうが一万人であろうが、舞台芸術は世界を変えることができる。いや、きっと変えることでしょう。